
けいおん！　—もう一人の私—

しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ ―もう一人の私―

【Nコード】

N3629P

【作者名】

しのぶ

【あらすじ】

律 「なあ、唯の様子少し変じゃなかったか？」

梓 「唯先輩はいつも変ですけど今日は特に変でしたよね」

滯 「話をしてる時なんかはいつもと同じだったけど」

紬 「うん唯ちゃん自身は何も変わってないんだけど・・・」

いいのかな・・・」

少し様子を見て考えましょう！」

滯 「そう・・・何て言えば

梓 「とにかくもう

その1 『異変』 (前書き)

『たのしそう・・・』

『どうしてあなただけが・・・』

『お願い私も仲間に入れて・・・』

『あなたが羨ましい・・・』

『あ．．．手が．．．』

『もう少し．．．もう少しで届きそう．．．』

『．．．．．』

その1 『異変』

— ぽかぽか陽気が眠気をさそう、そんな5月のある朝 —

憂 「お姉ちゃん、早く起きなきゃ・・・」

唯 「おはよう憂、私ならも起きてるよ」

憂 「え？ええ！・・・お姉ちゃんが私より早く起きてるなんて！」

唯 「えへへへ・・・うーいーいー！」

唯は憂に抱きつく嬉しそうに頬擦りをした。

憂 「ちょ・・・ちよっとお姉ちゃん今日は朝からどうしたの？」

唯 「こうやって自由に憂に抱きつけるのが嬉しくって」

憂 「自由になって・・・私嫌がった事なんか一度も無いでしょ？」

唯 「いいのいいの、こっちの話だから、憂大好き」

憂 「もうお姉ちゃんたら／＼／早く朝ごはん食べないと遅刻しちゃうわよ」

唯 「うん、食べる」

いつにも増して甘えてくる唯をなだめながら朝食を済ませ、学校に行く準備をする二人。

憂 「あれ？お姉ちゃん、髪の毛寝ぐせってるよ？」

唯 「あ、ほんとだ」

憂 「私が梳かしてあげるから鏡の前に座って♪」

唯 「!!!!!!!!!!」

憂 「どうしたのお姉ちゃん？！」

唯 「嫌！鏡は見たくないの！」

憂 「見たくないって？どう言う・・・」

唯 「見たくないものは見たくないの！」

憂はどうしてこんなに鏡を拒絶するのか意味が分からなかったが体を震わせている唯を見ると本気で嫌がっているのだと悟り、なだめる様に言った

憂 「わかったよお姉ちゃん！そんな気分の時もあるよね、」

そう言って唯をベットに座らせ髪を梳かし始めた

憂 「お姉ちゃんの髪って触っていると気持ちいい」

唯 「えへへへへ／＼／＼」

憂 「ん・・・あれ？・・・どうしてだろ、今日はなかなか治まらない・・・前髪も変な方向に流れるし」

唯 「も、もうこれくらいでいいよ、ちゃんとなってるし、それより急がないと遅刻しちゃうよ」

憂 「え？！もうこんな時間！お姉ちゃん早く行こ！」

慌てて家を出る二人、

憂が玄関の鍵を閉めている横で唯が一瞬よろめき倒れそうになり目頭を押さえた

唯 （うわぁ・・・めまいがしそう・・・）

憂 「何してるの?!」

唯 「う、ううん・・・何でもない、それより急がなきゃ!」

そう言うとな唯はいつもとは逆に走り始めた

憂 「ちよっとお姉ちゃん?! どこに行く気なの? 学校こっちですよ!」

唯 「え? あ・・・ああ! 寝ぼけて右と左間違えちゃった／＼／」

憂 「もう、しっかりしてよお姉ちゃん!」

ぎりぎり予鈴の鳴る前に学校へと到着した二人

憂 （お姉ちゃん・・・曲がり角の度に道を間違えて・・・まだ寝ぼけてるのかな?）

唯 「ふう、なんとか間に合ったね」

ふと門の外を見ると律が必死の形相で走って来た

律 「ひいゝ! ギリギリセーフ!・・・唯、憂ちゃん、おいゝゝっす!」

唯 「おはよう律ちゃん!」

憂 「律さん、おはようございます」

唯 「律ちゃんも髪とおでこのお手入れで遅くなったの？」

律 「違うよ！今朝聡の奴が熱出しちゃってさ、氷枕とかお粥とか用意してたら遅くなって・・・てかデコの手入れって何なんだよ！」

唯 「え？！聡君大丈夫なの？熱って高いの？」

律 「あゝ大丈夫大丈夫！7度4分くらいの微熱なんだけど、念のため寝とけ！ってベットに縄で縛り付けてきたから」

唯 「ひどっ！」

律 「うそうそ！本当は優しくお布団を掛けておでこにキスをしてあげて・・・」

唯 「それもある意味ひどっ！」

律 「どう言う意味だよ！」

唯 「いつもはガサツな姉が、あの姉が、こんなに優しくておしとやかな訳がない！って悩んで余計熱が上がってるかもしれないじゃない」

律 「なにおおゝ！そんな事言う奴にはスペシャルデコピンだ！」

唯 「ああ！お代官様お許しくださいませゝ！」

律 「ならぬならぬ！観念してこちらにデコを出せい！」

唯 「ひええええええええゝ！」

さわ子「ちよつとあなた達何してるの?!もうすぐHRが始まるから早く教室に入りなさい!」

職員室の窓から先生に声を掛けられ、急いで下駄箱へと走る三人

律「お、おい唯!・・・どこ行くだよ!そっちは一年生の下駄箱だろ!」

唯「あ・・・いっけなく間違えたあ」

律「こんな毎日繰り返してる事をどうやったら間違うんだよ!」

憂「お姉ちゃん・・・朝から様子がおかしいけど体調が悪いんじゃないの?」

律「え?そうなのか唯?!」

憂「朝からふらふらしてるし、今みたいに方向間違えたりするし、熱でもあるんじゃないの?」

唯「そ、そんな事ないよ!全然平気だって!」

憂「お姉ちゃんいつも無理するから・・・私心配になっちゃうよ」

唯は今にも泣き出しそうな憂を優しく抱きしめた

唯 「憂は本当に優しいね、ほら、こうやって抱きしめたら熱が無
いってわかるでしょ？心配しなくても大丈夫だからもう泣かないで」

憂 「お姉ちゃん・・・」

律 「相変わらず仲のいい姉妹だな、大丈夫だよ憂ちゃん！何かあ
ったら私が保健室に連れて行くから」

憂 「はい、お願いします・・・お姉ちゃんも絶対に無理しちゃ駄
目だからね」

唯 「うん、わかった」

それぞれの教室へと移動した三人

HRが終わり一時限目、唯は現代国語の授業を受けていた

先生 「じゃあ平沢さん、次の小説を読んでみて」

唯 「は、はい！（うわぁ・・・目がチカチカする・・・）」

先生 「どうしたの平沢さん？」

唯 「え・・・えっと・・・さい・・・しょ・・・あゝ！最初・・・
の・・・ペンギン！・・・あと・・・えゝつと、
えゝつと・・・」

先生 「ちよつと平沢さんどうしたの？簡単な漢字で詰まるのも変だ

けど片仮名で詰まるって・・・」

唯 「す、すいません・・・」

律 「先生！唯の奴、今日は朝から体調が悪くて頭がボーっとするみたいなんです！」

先生 「そうなの平沢さん？保健室に行って休む？」

唯 「い・・・いえ・・・大丈夫です」

先生 「そう、でも我慢しないで無理だと思ったらすぐ先生に言いなさいね」

唯 「・・・はい」

漣 「唯！律の言った事本当なのか？休まなくて大丈夫なのか？」

唯 「うん、大丈夫だから心配しないでね」

六時限目まで無事授業を終えた唯達は音楽室へと集まった

漣 「なあ唯、本当に体の方はなんともないのか？」

梓 「え？唯先輩、具合でも悪いんですか？」

唯 「大丈夫だって、ほらこんなに元気元気！」

唯は両肘を曲げて力瘤を作るフリをして、フンと鼻息を荒げた

紬 「でも唯ちゃん、今日の授業ほとんどノート写してなかったでしょ？」

唯 「それは・・・ちょっと・・・」

漚 「本当なのか？今日の英語とかテストに出るって言ってたぞ！」

紬 「大丈夫よ唯ちゃん、さっき私のノート、コピーしておいたから」

唯 「ありがとうムギちゃん！嬉しすぎてキスしたくなっちゃうよお」

紬 「ゆ、唯ちゃん／＼／」

梓 「はいはい、それじゃ早速」

紬 「お茶にしましょ♪」

梓 「ムギ先輩！」

唯 「あずにゃーん、まず栄養を摂らなきゃいい演奏はできないよお」

紬 「今日のお菓子は『ヴィスキュイ・オ・ノワゼット』よ♪」

唯 「ほらほらあずにゃん！いい匂いだよぉ～！美味しそうだよぉ～！輝いてるよぉ～！」

梓 「もう！わかりましたよ！・・・でも食べ終わったら練習しますからね」

唯 「わかってるよぉ～・・・もぐもぐ」

紬の淹れる美味しい紅茶とお菓子は至福の時を皆に与えた

律 「今日のお菓子はふわふわとした食感のクッキーみたいな、何と言うか初めての経験って感じの美味しさだったな」

漣 「優しく甘いふわふわクッキー、そっと摘んで食べさせて欲しいの・・・」

律 「・・・漣・・・何言ってるんだよ・・・」

漣 「え？何となくいい歌詞が出来そうな気がして／＼／＼」

紬 「それじゃそろそろ練習でもしましょうか？」

紬に即されて、唯と梓と漣はケースからギターを取り出した

唯 （私のギター・・・あれ？・・・えっと・・・こっちがこうで・・・）

梓 「唯先輩！何やってるんですか？」

唯 「う、ううん何でもないよあずにゃん、それよりもう一杯だけお茶しない？」

梓 「何言ってるんですか！一曲も演奏してないのに休憩は認めませんからね！」

漣 「さすがにそれはダメだろ」

唯 「うゝ・・・」

律 「よし！じゃあ最初は『ホッチキス』から行ってみるか！1・2・3・4・1・2！」

唯 （えゝつとえゝつと・・・）

唯の出した音は初心者のものよりも酷く、とても演奏と呼べるものではなかった

律 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

梓 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紬 「唯ちゃん？・・・」

唯 「みんなごめん！ちょ……ちょっと調子が悪くて！えへへへ……」

滯 「なあ唯……音出さなくていいからいくつかコード押さえてくれないか？」

唯 「え？な……何言ってるの滯ちゃん……コードくらい楽勝だよ」

滯 「いいから『ホッチキス』の最初だけでもいいから押さえて！」

唯 （えっと……ここがこうだから……左手の人差し指が……）

律 「唯……それ冗談じゃなく本気でやってるのか？」

梓 「唯先輩！一つもまともに押さえてないじゃないですか！」

唯 「……ごめんなさい、ごめんなさい」

紬 「唯ちゃん……」

律 「唯……一体どうしちゃったんだよ……」

唯に何が起こったのか、あまりの出来事にみんなは言葉を失ったまま立ち尽くしていた。

その2 『心配』

いつの間にかギターが弾けなくなっている唯
みんなは原因が何なのか必死で探ろうとしていた。

漣 「昨日までは何の問題もなく普通に弾いてたよな？」

紬 「唯ちゃん急に弾けなくなった事に何か心当たりとかない？」

律 「原因って言ったって何か考えられるか？」

紬 「例えばだけど、頭を強く打って一意的に運動機能がマヒしたとか」

唯 「頭なんか打ってないもん・・・」

律 「だよな！朝、家から憂ちゃんと一緒に来てるんだから、何か事故みたいな事に遭ってたら分かるだろ？」

漣 「じゃあ何が原因なんだろうな？」

唯 「だから今日はたまたま調子が悪いだけで・・・それより！」

唯が必死にごまかそうと別の話題を振ろうとしている

律 「いや！さっきの演奏は調子が云々ってレベルじゃないって！」

漚 「うん、演奏できる人間が体調不良で間違えるって言うのとは違って、まるで初心者みたいだったぞ?!」

梓 「そうだ!唯先輩!」

何かを思いついたのか梓は自分のギターで1音だけ爪弾いてみた

唯 「何?あずにゃん?」

梓 「唯先輩、今出した音の音階って分かりますか?」

唯 「うん『ラ』だよね?」

梓 「じゃあこれは?」

唯 「えっと『ファ』」

梓 「それじゃ次に、今から私のギターの調律をしてもらえますか?」

唯 「え?別にいいけど」

梓は自分のギターの弦を全部緩めてから唯に手渡した
唯は弦を1本ずつ弾きながら締めていった、その姿は鼻歌交じりで
実に楽しそうだった。

唯 「ふんふんふん♪ふふふん♪・・・はい！出来たよ」

律 「はやつ！」

梓は自分のチューナーを取り付けて音程を確認してみた

梓 「やっぱり・・・」

澤 「梓、何がやっぱりなんだ？」

梓 「唯先輩、絶対音感は失ってないですよ！」

紬 「それって『音』に対する感覚は今まで通りなのに、楽器の演奏だけが下手になっちゃったって事？」

梓 「そうですよ！今の唯先輩は音感完璧なままだから歌は今まで通りに歌える筈です、ただギターの演奏だけが出来なくなってるんですよ！」

律 「それってどう言う症状なんだよ？」

唯 「症状って・・・だから病気とかじゃなくて・・・ほら・・・あれだって・・・」

唯は益々焦って何を言っているのか分からなくなっていた

漣 （でも今の唯のチューニング、何か違和感があったような・・・）

唯 「たぶん今日だけ調子が悪いんだと思うんだあゝ・・・えへへへ」

律 「んゝ・・・確かにこうして話してると何も変わった所は無いしな」

そこへ唯の事を心配した憂が入ってきた

憂 「おじゃましますゝす、お姉ちゃん大丈夫？」

唯 「あ、憂・・・心配して来てくれたの？」

憂 「もし具合が悪いんだったら帰りに一緒に病院にでも行こうかなゝって思ってた」

唯 「大丈夫だよ、この通りピンピンしてるし」

律 「唯！どっちにしても今日は練習にならないから帰ってゆっくり休んだらどうだ？」

漣 「私もそうした方がいいと思うぞ」

唯 「うん・・・じゃあ今日はこれで帰るね・・・みんな心配掛けてごめんなさい」

梓 「何言ってるんです！心配するのは当たり前じゃないですか！」

律 「そうだぞ、もしこれが逆のパターンで私や他の誰かの具合が悪かったら、いつも一番心配をするのは唯だからな」

紬 「もし急に気分がすぐれないとか、そんな症状が出たら私に電話してきてね、普通の救急車で病院に行くよりも早く医師団を送る事ができるから♪」

律 「何気に凄いな・・・」

唯 「みんなありがとう」

みんなの優しさに触れて唯は胸が熱くなった

憂 「じゃあみなさんお先に失礼します」

唯 「また明日ね」

唯は憂に手を繋いでもらい家路へと向かった

憂 「お姉ちゃん？」

唯 「何？憂？」

憂 「軽音部のみんなって素敵な人ばかりだよね」

唯 「うん、いつも見てて羨ましかったもん・・・」

憂 「え?・・・何かその言葉の使い方おかしくない?まるで他人事みたい・・・」

唯 「え?え?そ・・・そうなか?もっと国語の授業頑張んなきゃ、えへへへ／＼」

憂 「やだあ、お姉ちゃんったら、うふふふ」

二人は途中で晩御飯の材料とアイスを買って帰った家に着くと憂はお風呂を沸かし晩御飯を作り始めた

憂 「お姉ちゃん!お風呂沸いたけどご飯の前に入る?」

唯 「うん、ちょっと汗かいちゃったから先に入るね」

着替えの服を持ってお浴室へと向かう唯

憂 (あ!そうだ・・・お姉ちゃん今朝は鏡を嫌がってたけどお風呂の鏡は大丈夫なのかな?)

朝の唯の態度を思い出し、憂は心配になって浴室を覗きに行った

唯 「・・・は・・・よね・・・」

憂 （あれ？お姉ちゃん誰と話してるんだろ？）

唯 「今日の私は失敗だらけだったなあ・・・もっと上手くやんなきゃ・・・でもやっぱり軽音部のみんなは優しいよね・・・一緒に居られるだけで心が暖かくなるもん・・・ねえ唯聞いてる？、あなたは本当に幸せ者ね・・・」

憂 （お姉ちゃんもしかして鏡に映った自分に話しかけてるの？なんだか可愛い！）

唯 「!!!!・・・憂？そこに居るの？」

憂 「うん、お姉ちゃん今朝、鏡見るの嫌がってたでしょ？その鏡って結構大きいから大丈夫かなって」

唯 「う、うん！大丈夫だよ！」

憂 「じゃあご飯の支度に戻るね」

暫くして唯がお風呂から上がってきた

唯 「わぁー美味しそう、やっぱり憂は料理の天才だねえ、見るだけで食欲がモリモリ湧いちゃうよお！」

憂 「そんな、大袈裟だよお姉ちゃん／＼／」

唯 「そんな事ないよ、私ずっと好きな時に好きなだけ憂の料理が食べられたらな〜って思ってたもん！」

憂 「え？いつも食べてるじゃない」

唯 「え！・・・あ！・・・うん、そうだね／＼／」

憂 「うふふふ、変なお姉ちゃん」

会話が弾む食卓で憂はふと違和感に気付いた

憂 「あれ？お姉ちゃんどうして左手でお箸もってるの？」

唯 「えっと、これは・・・そう！今日ギターの練習しすぎて右手がちよつと筋肉痛って言うか・・・その・・・」

憂 「え〜！大丈夫なの？」

唯 「う、うん・・・ちよつと痺れてるだけだから一晩寝たら治ると思うしね」

憂 「ふう〜ん、でもお姉ちゃんって器用に左手でお箸使うね」

唯 「そ、そうかな？誰でもこれくらい出来るでしょ？」

憂 「私左手でお箸なんて使えないよ〜」

唯 「じゃあ私って凄いだね、えへへ／＼／＼」

憂 「うふふふ」

楽しい食事が終わって憂は後片付けを、唯は自室でギターを見ている

唯 （うゝん・・・明日からクラブどうしよう・・・そうだ！弦を張り替えたらいけるかも！）

唯はギー太の弦を全部外し入れ替えようとした

唯 （ブリッジって少し斜めになってたんだ・・・でもこれは何とか我慢して・・・て、あ！一弦のナットだと穴が小さくてに六弦が入らない・・・これじゃ張りかえらんないよゝ・・・仕方ない、明日のお昼休みにこっそりと楽器屋さんに行って相談してみよつと）

唯は仕方なくその夜はあきらめて寝る事にした
お風呂から上がった憂が、パジャマに着替えベットに座っていると扉をノックする音がして唯が枕を持って入ってきた

憂 「お姉ちゃんどうしたの？」

唯 「ねえ・・・憂・・・一緒に寝てもいい？」

憂 「え？急にどうしたの？」

唯 「ダメ？・・・」

憂 「ううん、私もお姉ちゃんと一緒に寝たい！」

唯 「えへへ／＼／＼おじゃまします」

憂 「うふふふ、お姉ちゃんあったかいね／＼」

憂 「憂もあったかいよお・・・私、憂が妹で本当によかった」

憂 「お、お姉ちゃん／＼」

唯 「憂・・・私の妹に生まれてきてくれてありがとうね・・・」

憂 「私もお姉ちゃんの妹で本当によかった！」

唯 「うん・・・おやすみ憂・・・」

憂 「おやすみなさい・・・お姉ちゃん・・・」

憂は多少の違和感を感じながらも、いつもより優しい唯に甘え眠りについた。

その3 『疑念』

翌日のお昼休み、唯はこっそりと学校を抜け出し商店街へと向かった

唯 （えーっと・・・楽器屋さんは左奥だったから、ここだとこっちに行つて・・・）

道に迷いながらもなんとか到着した唯
さっそく店員にギー太を差し出して相談をする

唯 「すみません、このギターの弦を張り替えてレフティにしたいんですけど出来ますか？」

店員 「え？こちらのギターを左利き用に調整するんですか？」

唯 「はい！」

店員 「弦を入れ替えるだけでしたらナットを交換するだけで出来ま
すけど、それでは音が微妙にずれてしまいますのでブリッジの傾斜
を逆にする必要もあるんですが、その作業は結構大変でギターを何
日かお預かりする事になりますし、費用の方も数万円は掛かると思
いますけれどよろしいでしょうか？」

唯 「え！そうなんですか?!」

唯はしばらく悩んだ後、とりあえずナットだけを交換してもらい弦を張りなおした

唯（うん・・・微妙な音のずれはその都度調整すればいいし、これでみんなと一緒に演奏ができる！）

唯は喜び勇んで学校へと戻り午後の授業を終えた
放課後はみんなよりも先に音楽室へと向かい、一人でギター太の音を調整していた

梓（あゝゝ！やっと掃除が終わったゝ！・・・昨日は全然だったけど今日は練習できるのかな？）

階段を上がろうとした梓は音楽室から聞こえてくる演奏に驚いた

梓（これって唯先輩のギター太の音だ！今日はいつも通りちゃんと演奏出来てる！）

大喜びで音楽室の扉を開ける梓、
大事にギター太を抱えて演奏している唯の姿を見て梓はホッと胸を撫で下ろした

梓「唯先輩！調子が悪かったのはもう治ったんですね？！」

唯 「あ！あずにゃん！もう大丈夫だよ、この通り演奏もバツチリ！」

梓 「よかった！昨日は本当にどうしたのかと心配したんですからね！」

そこへ他の三人もやって来た

律 「今ギター弾いてたの唯だろ？」

紬 「唯ちゃん？もう体調の方はいいの？」

漣 「よかったあ、昨日のままだったらどうしようかと思ってたけど・・・」

そこまで言って漣が違和感に気付いた

漣 「唯？ギターの弦、張り替えたのか？」

梓 「あ！本当だ！左利き使用にしてる・・・」

律 「唯、急にどうしたんだ？」

唯 「え・・・えーっと・・・なんとなくこっちの方が弾きやすいかなーって思って・・・」

律 「唯って本当は左利きだったのか？」

唯 「えーっとえーっと・・・両方使えるけど、どちらかと言うと左の方がしっくりくるみたい」

紬 「へえー両方で演奏できるなんて唯ちゃん凄いわねー」

唯 「えへへへ、それほどでも／＼／＼」

漣 （そうか！昨日唯がチューニングしてた時の違和感がわかった！左手で弦を爪弾いてたからだ）

梓 「私さっき唯先輩の演奏聞いてましたけど、これなら大丈夫ですよ！」

漣 「なあ、唯・・・」

何かを不信に思ったのか、漣が唯に話しかけた

漣 「唯、ちょっと右手を見せてくれないか？」

唯 「ほえ？別にいいけどなんで？」

唯が右手を差し出すと、漣は指を一本ずつ丁寧に触り始めた

唯 「滞ちゃんくすぐったいよお」

律 「滞？何やってるんだよ？」

滞 「唯・・・これってどう言うことなんだ？」

唯 「え？何が？」

滞 「唯の右手の指先・・・昨日今日弦に触れた指じゃないぞ！ずっと練習してきたみたいに硬くなってるじゃないか！」

唯 「え！・・・それは・・・その・・・」

滞 「それは急に左で弾くようになった手じゃない！ずっと左利きだった手だ！左利きの私だからこそ誰よりもよく分かるんだ！」

律 「ちよ、ちよっと落ち着けよ滞！結局何が言いたいんだよ？」

滞 「そ・・・それは・・・唯は本当に唯なのか？」

律 「はあ？目の前に居るのが唯じゃなかったら誰だって言うんだよ？」

唯 「ひどいよ滞ちゃん、私みんなと一緒に演奏したくて今日のお昼に楽器屋さんまで行って弦を張り替えてきたのに」

滞 「いや・・・私も自分で言ってる変だとは思うけど・・・」

梓 「でも急に左利きになるなんておかしいですよ？」

唯 「あずにゃんまで・・・私は唯だよ・・・平沢唯だよ・・・」

そう言うとき唯はポロポロと涙を流し始めた

唯 「さわちゃんが猫耳を持ってきて、それで私があずにゃんて呼んだのだって覚えてるもん、学園祭だって新観ライブだって全部覚えてるもん！」

梓 「べ、別に唯先輩が偽者だなんて言っていないじゃないですか、目の前に居るのはまぎれもなく唯先輩ですよ」

律 「そうだよな、どう見たって唯意外には見えないぞ？ってか中身も唯意外には思えないんだけど？」

紬 「そうよね？（でも私もどこかいつもの唯ちゃんとは感じが違うって思う）」

漣 （私も自分が変な事言ってるのは分かってるけど・・・だけどどこか違和感があるんだよね・・・）

唯 「漣ちゃん・・・やっぱり私の事変だと思ってる・・・」

律 「漣！いい加減にしとけよ！」

その時、急に紬が大きな悲鳴をあげた

紬 「きゃあああああああああ！」

律 「え！え？何だ何だ！」

漚 「びっくりしたあああ！」

梓 「ムギ先輩どうしたんですか急に！」

紬 「え？！……ご……ごめんなさい！……ななな……何でもないの」

唯 「何でもないって、ムギちゃん凄い汗かいてるじゃない？」

漚 「ムギさつきから震えてるけど寒気がするのか？」

紬 「う、ううん……だだ……大丈夫だから」

律 「何だか毎日誰かが具合悪くなるみたいだな、お祓いでもするか？」

漚 「気持ち悪い事言うな~~~~！」

暫くして我慢しきれなくなったのか紬が律に声を掛けた

紬 「ね……ねえ律ちゃん……」

律 「ん？どした？」

紬 「ちょっと・・・気分が悪いから・・・ほ、保健室まで連れて行ってもらえないかしら？」

律 「なんだよ！やっぱ具合が悪かったんじゃないか！どうして我慢するんだよ、ほら肩につかまって」

唯 「ムギちゃん大丈夫？」

紬 「う・・・うん」

律 「じゃあムギを保健室に連れて行くからみんなはここで待って」

梓 「私2年の保健委員やってますから着いて行きます！」

律 「おう、じゃあ梓はそっちの肩持って」

二人に肩を支えられながら紬は保健室へと向かった

唯 「ムギちゃん大丈夫かな？」

漑 「うん、かなり具合が悪そうだったからな、盲腸とかそんなんじゃなかったらいいんだけどな」

唯 「うん・・・」

— 1階保健室 —

中に入ると紬は凄い勢いで話し始めた

紬 「律ちゃん梓ちゃん聞いて!」

律 「お、おい! 何だよ急に! 体の具合が悪いんじゃないのかよ?!」

紬 「私見ちゃったの!」

梓 「見たって何をですか?」

紬 「さっきみんなは窓際に立ってお話をしてたでしょ?」

律 「ああ・・・」

紬 「それで入り口の方立ってた私の方を向いてお話をしてたわよね?」

梓 「ええ、そうですね」

紬 「私だけが窓の外を見てたのよ」

律 「なあムギ、今ひとつ話が見えてこないんだけど」

紬 「私それを見ながらずっとこのカメラでこっそり動画を撮っていたの」

紬 「私も怖かったけど、ずっと我慢して撮影してて、それで一つ気が付いたの」

梓 「何をですか？」

紬 「窓に写った唯ちゃんが何か話してるの・・・」

律 「滯は置いてきて正解だったな、こんなの見たらあいつ1週間はうなされるぞ」

梓 「確かに・・・確かに何か話してる・・・と言うか訴えてる感じがしますね」

紬 「私じつと窓の唯ちゃんの口元を見てて、そしたら同じ言葉を繰り返してるって分かったの」

律 「んー・・・6文字・・・いや7文字の言葉を繰り返してるな」

梓 「お・お・あ・あ・あ・い・え・・・ですかね？」

律 「なんだそりゃ？」

紬 「梓ちゃん・・・その言葉そのまま声に出さないで口だけ動かして頭の中で繰り返してみて」

梓 「え？こうですか？（おおあああいえ・おおあああいえ・おおああ・・・）」

紬

[illegible]

律

「分かった! . . . 『ここから出して』だ . . . 」

その4 『質問』

窓に写った唯が助けを求めている

ありえない映像を目の当たりにした3人は言葉を失った

梓 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

律 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紬 「・・・・・・・・律ちゃん、これってどう思う？」

律 「確かに何度見ても『ここから出して』って言ってるように見えるよな」

梓 「それもただ言ってるんじゃないくて、私には泣きながら叫んでるように見えるんですけど・・・・」

律 「そう言われれば・・・・そんな風にも見える・・・・かも」

梓 「唯先輩が閉じ込められて助けを求めているんじゃないですか？！」

律 「はあ？何バカな事言ってるんだよ！じゃあ今音楽室で待ってる唯は何なんだよ？！」

梓 「・・・・・・・・そうですよね」

紬 「ねえ、テレビやなんかでよくこんな写真や映像の特集がある

でしょ？」

律 「うん」

紬 「そんな番組だところ言うのは大抵『悪霊』で、写ってる本人に悪影響を及ぼすとか・・・」

律 「ムギ！怖い事言うなよ！」

梓 「それって唯先輩の様子がおかしい事と関係があるって事ですか？」

紬 「それは断定できないけど、可能性はあると思うの」

律 「とにかく音楽室に戻ってみよう」

その頃、音楽室では滯が唯に疑問をぶつけ問い詰めていた。

滯 「なあ、唯・・・」

唯 「何？滯ちゃん？」

滯 「正直に言うが、今私の目の前に居る唯は、唯以外の何者でも無いと思う・・・だけど同時にどうしても拭い去れない違和感もあるんだ」

唯 「・・・滯ちゃん・・・まだそんな事思ってたんだ」

漣 「私自身もおかしい考えだと思ってる！怒ったなら謝る！・・・でも、どうしてもその違和感に対して安心できる『当たり前前の答え』が欲しいんだよ！」

唯 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣 「唯・・・答えてくれないか？」

唯 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣 「さっきも聞いたが、どうして右手の指先がずっと弦を押さえてたように硬くなってるんだ？」

唯 「だからそれは・・・左で弾く練習もしてたから・・・」

漣 「じゃあ逆に、左手の指先はどうして硬くなってないんだ？一昨日までは左手で普通に弦を押さえてたよな？」

唯 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣 「どうして今日に限って髪留めを左につけてるんだよ・・・」

唯 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

漣 「それより・・・さっきから無意識でノートに落書きしてるんだと思うけど・・・それ・・・何を書いてるんだ？」

見るとそこには左右が反転した文字が書き綴られていた

唯 「!!!!!!!!!!!!!!」

唯は激しく席を立つと音楽室から飛び出すように走り出した
廊下にはちょうど帰って来た律達が立っていてぶつかってしまう

律 「イテ!・・・あ・・・おい唯!」

梓 「唯先輩!」

音楽室の中を見ると漣が暗い表情でうつむいていた

律 「漣? いったい何があったんだ?」

漣 「私が・・・私が唯にひどい事を言ってしまったんだ・・・」

律 「ひどい事って? 唯に何を言っただよ!」

漣は唯に聞いた質問と、それに対する唯の反応を話した

漣 「私・・・何バカな事考えてたんだろう・・・違和感なんてあ
やふやな事で唯を傷つけて・・・」

重い空気が漂う音楽室

暫くの沈黙の後、律が口を開いた

律 「違和感か・・・もしかしたら梓の考えが正解だったのかも知れないな・・・」

梓 「本当の唯先輩が閉じ込められてる・・・てあれですか？・・・」

律 「ああ・・・」

漚 「どう言う意味だよそれ？」

律 「いいか漚！深呼吸をして気をしっかり持てよ！」

そう言うのと律はさっき見た映像を漚に見せた、窓に写ってる唯の姿を見た途端、漚は気を失い倒れそうになったが律に支えられ何とか持ちこたえた

漚 「こ・・・こ、これって・・・」

ガタガタと震える漚を支えながら律は言った

律 「突拍子も無い考えかもしれないけど・・・ここに写ってるのは一昨日まで私達と一緒に居た本物の唯かも知れない・・・」

滯 「本物って！・・・じゃあ今私が話してた唯は偽者だって言うのか？・・・確かに違和感云々を言い出したのは私だけど・・・」

梓 「とにかく唯先輩を探して話を聞かない事には何も前には進みませんよ！」

律 「そうだな、手分けして探そう」

その頃、教室を飛び出した唯は家へと向かって走っていた

唯 （私と唯と何が違うって言うの・・・私だって唯なのに・・・
どうして私じゃないけないの・・・）

涙で顔をグシヨグシヨにしながら帰って来た唯を見て憂は驚いた

憂 「お！お姉ちゃんどうしたの？！」

唯 「私・・・私もう・・・」

玄関を入ってすぐに泣き崩れる唯

憂 （誰かと喧嘩をしたの？どこかで怪我をしたの？まさか・・・
まさか・・・）

ありとあらゆる可能性が憂の頭の中に湧き上がり体中の震えが止まらない

憂 「お姉ちゃん！しっかりして！お姉ちゃん！」

唯 「私は唯だよお・・・憂のお姉ちゃんだよお・・・」

憂はどうしていいのか分からず、泣きながら唯を抱きしめていた

憂 「当たり前じゃないの！お姉ちゃんはお姉ちゃんですよ！」

唯 「気付かれ・・・ちゃった・・・」

憂 「どうしたの！何があったの？！」

唯 「やだ・・・やだやだやだ！・・・もうあんな所には戻りたくない！」

憂 「あんな所って・・・お姉ちゃんやっぱり軽音部で何かあったのね？」

そこへ律と漑がやってきた

律 「やっぱり家に帰ってたか」

澤 「ムギと梓にも連絡しよう・・・」

唯 「いやあああああああ！」

唯は大声を出して2階の部屋に逃げ込んだ

律 「唯！待て！」

追いかけようとする律の前に腕を広げて制止する憂の姿があった

憂 「お姉ちゃんに何をしたんですか！・・・お姉ちゃんがあんなに泣くなんて、一体何をしたんですか！」

そう言って声を荒げる憂の目からは涙がポロポロとこぼれ落ちていた

律 「みんなが集まったら説明するから・・・とりあえず落ち着こう・・・な」

程無くして紬と梓が合流した

その5 『姉妹』

憂 「お姉ちゃんに何をしたのか話して下さい・・・」

静かに話す憂だがその声には怒りの感情が込められていた
とりあえず応接間へと通された4人

律 「私から説明するよ」

憂 「はい・・・」

律 「今から普通なら信じられないような話をするから、まず頭を
冷やして冷静に聞いてくれないか」

憂 「・・・分かりました」

律 「憂ちゃんは一昨日までの唯と、今の唯と、何か違いがあると
感じないか？」

憂 「お姉ちゃんの何が違うって言うんですか！お姉ちゃんはいっ
つも優しくて・・・」

律 「だから冷静に聞いてくれって言っただろ！」

感情だけで話をする憂を律は叱りつけた
でもそれは姉を思うが故の言動なんだと思いつぐに反省した

憂 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

律 「大きな声をだしてわるかった・・・ごめん・・・でも冷静に判断するのは今大事な事なんだ」

憂 「わかりました・・・続けてください・・・」

律 「唯に違いが生じた・・・と言うか違和感のようなものを感じなかったか？」

憂 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

紬 「どんな小さな事でもいいの」

憂 「確かに昨日から急に方向音痴になったり、左手でお箸を持つようになったり、鏡を怖がったり・・・でも」

律 「鏡を怖がる？」

紬 「律ちゃんそれってやっぱり・・・」

憂 「やっぱりって何ですか？鏡を怖がるようになるなんて怖い夢を見たとか、色々原因が考えられるじゃないですか」

律 「・・・憂ちゃん、これを見てももらえないかな」

そう言って律はビデオカメラを渡し、窓に写った唯の映像を見せた

憂 「!!!!!!!!!!」

律 「そこに写ってる唯を見てどう思う？」

憂 「お姉ちゃんが泣いてる……ここから出してって泣いてる……」

憂は映像の中の唯を見ながら涙を流した

律 「記憶や行動は何も変わらないのに、急に左利きになったり、方向感覚がなくなったり、左右反転した文字を書いたり……」

紬 「そして私が撮影したこの映像……全ての事を繋ぎ合わせて出た答え……普通では考えられないし、まるで漫画みたいって笑われるかもしれないけど……」

律 「昨日からこっちの唯と鏡の中の唯が入れ替わってるとしか思えない！」

憂 「な……何を言ってるんですか?! そんな夢みたいな事、実際にある訳ないじゃないですか!」

律 「でもそう考えると全ての違和感に説明がつかないか？」

憂 「……………」

律 「ありえない夢のような事だけど、今の私達はこの変な考えに支配されてる・・・それを取り除くにはもう確認するしかないんだよ」

紬 「その為にはまず唯ちゃん本人に直接聞かないと駄目だと思うの」

律 「それは今の私達には出来ない・・・こんな状況でも唯が心の底から信頼して話が出るのは・・・やっぱり憂ちゃんだけだと思うから・・・」

憂 「・・・わかりました、私一人で2階へ行きますのでみなさんはここで待っててもらえますか？」

律 「うん・・・辛い役割を押し付けてごめんな・・・唯の事を頼む」

下を向き小刻みに震えている律

仲間の為に何も出来ない自分が情けなくて、悔しくて・・・憂にはそんな思いが痛いほど伝わってきた

憂 「お姉ちゃん・・・ここには私しか居ないから鍵を開けて・・・中に入れて」

唯 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

憂 「私、お姉ちゃんが何を言っても嫌いにならないから・・・お姉ちゃんが何をしても大好きだから・・・だからここを開けてよ」

唯 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

憂 「お姉ちゃん・・・う・・・うえええん」

扉の外で号泣する憂

その時鍵の開く音が聞こえた

唯 「憂・・・」

憂 「うわああああん！お姉ちゃん！」

開いた扉の前に立っていた唯に抱きつき憂は大声で泣いた

唯 「ごめんね憂・・・憂をこんなに泣かせるなんて・・・大切な妹にこんなに悲しい思いをさせるなんて・・・私はお姉ちゃん失格だね」

憂 「ううん、そんな事ない！お姉ちゃんは！お姉ちゃんは・・・」

言いたい事が言葉にならず、次から次へと涙が溢れてくる

暫く時間がすぎ、少し落ち着きを取り戻したところで唯が口を開いた

唯 「憂・・・本当にごめんね、私が間違っていたよ」

憂 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

唯 「もう憂は・・・ううん、もう他のみんなも気が付いてると思うけど」

その言葉を確かめるように、憂は静かに聞いてみた

憂 「ねえ、今のお姉ちゃんって、一昨日までのお姉ちゃんとは違うの?・・・」

唯 「うん・・・」

憂 「お姉ちゃんは鏡の世界からこっちに出てきたの?」

唯 「うん・・・」

憂 「それってどうしてなの? 鏡の世界で嫌な事でもあったの?」

大好きな妹がこれ以上悲しむのは見たくない、そう思った唯は全ての事を話し始めた

唯 「憂・・・嫌な事や嬉しい事なんて・・・鏡の世界にはそんなのは無いよ」

憂 「え?」

唯 「鏡はこの世界の光を反射してただ写し出してるだけ・・・私達鏡の中の人間には心も感情も何も無いんだよ」

憂 「・・・・・・・・・・・・・・・・」

唯 「鏡って無限に広がってるこの世界の全てを写してる訳じゃないでしょ？当然鏡や反射する物が無い場所もあるんだし」

憂 「うん」

唯 「私達の居た世界は鏡がある所だけが現れる、そんな細切れの世界なんだよ・・・そして私達は自分の意思や感情で動くんじゃないかって鏡を覗かれた時にだけその細切れの世界へ入り覗いた人の真似をする・・・ただそれだけなの・・・ずっとそんな事の繰り返し」

憂 「感情がないって・・・でもお姉ちゃんは」

唯 「うん・・・心を持ってる」

憂 「それってどう言う事なの？」

唯 「唯が中学生の頃までは私にも心なんて物はなかったよ、只々唯の真似を機械的にしてただけだったし」

憂 「うん・・・」

唯 「でも高校生になってからかな、唯ったらギターを持って毎日鏡の前に立つようになったでしょ？」

憂 「うん、毎日自分でミュージシャンみたいでかつこいゝとか言いながらね」

唯 「えへへへ、おかげで私もすっかりギターが上手くなったけどね」

憂 「うふふふ」

唯 「毎日毎日楽しそうな姿を見せられて、それを真似してるうちにいつの間にか『羨ましい』って感情が芽生えてきたの」

憂 「うん・・・」

唯 「感情が1つ生まれたらその後は色んな思いが溢れてきて」

憂 「そうなんだ・・・」

唯 「憂に頬擦りする時は凄く安らぐし、憂のご飯を食べてる時は凄く幸せだし、軽音部のみんなと演奏してる時は凄く楽しいし・・・」

憂 「うん」

唯 「でも感情が増えてきて、心が芽生えてきたら・・・逆に辛くなってきたね・・・」

憂 「楽しかったんでしょ？なのにどうして辛いのか？」

唯 「憂・・・自分で感じる心があるのに自由に動けないんだよ・・・
・楽しい事をしていても覗いてる人が鏡の前から離れられたらその

場所から追い出されちゃうんだよ・・・」

憂 「あ・・・」

唯 「もっと自由に楽しみたい！もっとたくさん幸せを掴みたい！唯が羨ましい！どうしてあなただけが！・・・そんな風に思うようになってきて・・・強く願うようになってきて」

憂 「うん」

唯 「一昨日の夜、洗面所で鏡に背中を向けてる唯に手を伸ばしたら鏡から手が出せて・・・一所懸命伸ばして唯に届いたと思ったら・・・入れ替わる事ができたの・・・」

憂 「それじゃ以前のお姉ちゃんは今鏡の中に居るの？」

唯は不意に立ち上がると姿見の前に立って自分の姿を写したそこには泣いて憂を呼んでる唯の姿が写っていた

憂 「お姉ちゃん・・・」

唯 「憂・・・本当にごめんね・・・私、自分の事だけ考えて唯を辛い世界に閉じ込めて・・・憂に悲しい思いをさせて・・・もう大丈夫だから・・・今から唯を出してあげるからね」

憂 「本当に？・・・でもそうしたら今のお姉ちゃんはどうなるの？また細切れの世界で辛い思いをするんじゃないの？」

唯 「私は平気だよ、今までもずっとそうだったんだし・・・」

憂 「・・・うう・・・お姉ちゃん・・・」

唯 「憂、悪いお姉ちゃんでごめんね・・・私の事嫌いになったでしょ？・・・唯と・・・本当の優しいお姉ちゃんと仲良くしてね」

憂 「お姉ちゃんは悪くなんかないもん！今のお姉ちゃんだって、自分が辛いのに私の為に我慢して！私の事ばかり考えて！うええええええええん」

唯 「憂・・・」

憂 「私どっちのお姉ちゃんも大好き！どっちのお姉ちゃんも辛い思いをして欲しくない！私はどうしたらいいの！ねえ、お姉ちゃん！」

唯 「憂、本当に優しい子・・・でもあなたが本当に愛情を注がなきゃいけないのは私じゃない『もう一人の私』よ」

憂 「私には何も出来ないの？」

唯 「・・・・・・」

憂 「・・・・・・」

唯 「それじゃこれからは毎日鏡の前で二人の仲がいい所を写してくれる？」

憂 「え？」

唯 「そうしたら私も毎日憂と仲良く出来るし、私は憂の笑顔が見られるだけで、それだけで幸せだから」

憂 「わかったよお姉ちゃん！これからずっとずっと鏡の前でお姉ちゃんの事抱きしめるからね！」

唯 「ありがとうね憂・・・それじゃ行くね・・・」

そう言うとき唯は鏡に近付き手を出した、
すると鏡の表面に波紋が起き、指先から徐々に吸い込まれていった
静かに静かに全身が吸い込まれた後、今度は本当の唯が静かに現れた

憂 「お・・・お姉ちゃん！」

唯 「憂・・・」

二人は言葉を交わす事も無く、ただ抱きしめ合い、その存在を確かめた

唯 「私・・・戻れたんだね」

憂 「うん！」

二人は下で待っているみんなの元へ行き、今起こった事の全てを伝

え喜び合った。

その6 『エピローグ』

翌日の朝、いつもより早く目が覚めた唯は部屋に置いてある鏡に写った自分に対して優しく話しかけた

唯 「おはよう、もう一人の私、今朝は顔色がいいね、今憂を呼んであげるからちよつと待っててね」

少しして憂が入ってきた

憂 「おはようお姉ちゃん！鏡の中のお姉ちゃんもおはよう」

唯 「憂〜こっちにおいで〜」

そう言う唯は憂に抱きつき頬擦りをした

唯 「えへへへ、憂〜」

憂 「うふふふ、ほら見て！鏡の中のお姉ちゃん凄く嬉しそう！」

唯 「もつといっぱい鏡を買って私達の姿を写してあげないとね」

憂 「うん！今日帰りに家具屋さんに行って注文してくるね」

唯 「ところで憂々今日の朝ご飯何々？」

憂 「えっとね、今朝はお姉ちゃんの好きなスクランブルエッグとパンプキンスープとポテトサラダと・・・」

以前にも増して仲良くなった二人

朝食を済ませ、戸締りをして唯達は学校へと向かった

いつも通りの授業・・・睡魔と戦いながらなんとか放課後まで乗り切った唯は音楽室へと向かう

そこには漣と律が先に来て話をしていた

唯 「漣ちゃん律ちゃん早いね」

律 「おいっすす！」

漣 「唯・・・ちょっとこっちに来て指先を見せてくれないか？」

唯 「ん？・・・もしかして漣ちゃん私の事疑ってるの？」

漣 「いや！そう言う訳じゃなくて」

唯 「別にいいよ、ほらほら触って触って」

漣 （ほっ・・・いつもの唯の手だ・・・）

律 「何ウツトリした顔で触ってるんだよ・・・もしかして百合に目覚めたのか？！」

漣 「そんな訳あるか！」ぽかつ！

律 「イテ！」

いつもと同じ緩い空間に流れるいつもの時間
そうこうしてるうちに紬と梓も合流した

紬 「あら？漣ちゃん、律ちゃん楽しそうね♪」

梓 「どうせまた律先輩が何か問題を起こして漣先輩に叱られてたんじゃないんですか？」

律 「なにおく！」

紬 「そうだ唯ちゃん！昨日話があった大きな鏡なんだけど授業中に運んでもらって立て掛けてもらったわよ♪」

唯 「え！この布が掛かってるのがそうなの？見ていい？！」

紬 「ええ、どうぞ」

唯が布を勢い良く取るとそこには5人全員が横に並んでも全身が写るくらい大きな鏡があった

唯 「うわぁー！おっきいね！」

律 「ムギ！これは凄いな！」

紬 「でしょ♪」

梓 「自分のフォームのチェックも出来ていいですね」

唯 （もう一人の私・・・これで練習もずっと一緒にできるね、これからは私が幸せだと思った事は全部鏡に写してあげるから・・・だから一緒にいっぱい思い出を作ろうね）

漚 「せっかくだから、みんなで並んで演奏しようか！」

一同 「賛成！」

そう言って準備を始めた時、唯が大声をあげた

唯 「あ~~~~！私のギターが」

梓 「あ・・・そう言えば弦を逆に張り替えたままでしたね」

唯 「あう・・・これじゃ演奏できないよぉ」

漚 「仕方ないな、今日は練習は諦めてみんなで楽器屋にでも行くか？」

律 「そうだな」

紬 「じゃあその前にケーキだけでも食べて行きましょ」

唯 「わーい！ケーキケーキ！」

紬 はケーキを5つテーブルに並べ紅茶を淹れ始めた

紬 「今日のケーキは『ノエル・フロマージュ』よ♪」

唯 「うわあああ！今日のケーキ美味しそう！」

梓 「いつも美味しそうですけど、今日のはまた特別美味しそうですよね」

唯 「そうだ！ギター太をケースに入れなきゃ！」

唯 はギター太を丁寧にケースに入れ椅子の上に置いた
振り返ってテーブルを見るとケーキが4つしか無い

唯 「あれ？私のケーキは？」

律 「え？知らないぞ！唯が食べたんじゃないのか？！」

唯 「私、今ギター太触ってたじゃない！誰！私のケーキ隠したの？」

梓 「え？ええ？！何で私の方見るんですか！私そんな事しませんよ！」

唯 「じゃあ律ちゃん・・・」

律 「なんでだよ」

滯 「おい！唯あれ！・・・」

滯は、さっき見ていた鏡の方を指差しながら叫んだ

唯 「あ！ああ~~~~！！」

鏡を見るとそこには

ケーキを2つ持って悪戯っ子のように笑う唯が写っていた。

おしまい —

—

『後書』

一気に早足で駆け抜けたように書き連ねた2作目・・・
キチンと形になっているか疑問ですけど、とりあえず完結する事ができました。

お目を通して頂いた方々には大変感謝致しております、ありがとうございます。

前回の「しあわせのつづき」を書き終えた後、今度は一時製作でもしようかな・・・
と脳味噌の量も考えない無謀な行為に出、書き始めたのはいいんですけどすぐに行き詰まり、

「物語が浮かばないく><」って状態になってしまいました。

考えれば考えるほど雑念のように本編とは違う物語ばかりが思い浮かんできて・・・(一一)；
だったらいつその事そっちも一緒に書きちゃえって事で「もう一人の私」の製作に至った訳ですw

なので本来は1話完結の短編のつもりだったんですが、前作の「ほのぼの」とは違う雰囲気を書いてて楽しくなってきた、ついつい5話も書きちゃいました。

ただ5話を書き終える間際に

「あれ？このままだと軽音部のみんなはハッピーエンドだけど鏡の中の唯ちゃんは辛いんじゃない？」
と思うようになりました。

「心を持った為に何もない世界に居る事が苦しくて出てきたのに、また辛い思いをする世界に戻しちゃった＞＜」

そんな後悔を解消するために「エピソード」を追加したんですけどお話がグダグダになったような気がして心配です^^；

とりあえず最後の2行・・・鏡の唯ちゃんの悪戯を書く事で

「私は鏡の中で辛い思いはしてないわよ、楽しく過ごしてるわよ、えへへ^^」

って意味を表したつもりですw

何はともあれ最後まで読んで下さった方々には感謝感謝です。

ありがとうございました

— しのぶ —

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3629p/>

けいおん！　－もう一人の私－

2011年2月21日23時37分発行